

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

注1 女学校の二年生くらいの時だった。

① 授業が終わってから図書室に行き、森鷗外おうがいの「阿部一族」あべを読んだことがある。図書室といっても戦時中のことだから、どの棚も本が二、三冊ばかり頼りなげに身を寄せあつてるといった風情ふうせいで、新刊本などもはやくに出版されてはいない時代だった。

図書係の上級生が一人いるだけの、田舎の女学校の名ばかりの図書室。少ない本の中から、ふと手にしてさしたる期待もなしに②グウゼン読みだしたのだが、③読み終わったときには深い溜息ためいきが出た。

よく知られているように「阿部一族」は、家光時代の肥後藩における殉死をめぐる話である。

封建時代の④インサンさ。運命をひきうける阿部一族の剛毅ごうぎさ。注2 性格悲劇でもあり、自分を貫ぬこうとすれば今尚なほ、村八分にされかねない日本の精神風土を衝ついてもいて、テーマのおもしろさもさることながら、私の感動はもつと別のところにあつたような気がする。

「これが散文というものか」  
というのがそれであった。

⑤ 図書室を出るとたそがれていて、くちなしの花がやけに匂におった。強烈なショックでその日の夕食がなぜかボソボソした感じで⑥ノドを通つたのも、はつきり覚えてる。

「阿部一族」は、まるで感情を交えないような淡々とした叙述に終始していた。けれども言葉の選択は精妙に働いていて、ただの史実の記述のみにはとどまっていない。

沈着、冷静、簡潔。

物足りないくらいのもつけなさだが、この文章全体の香気はいつたどこから発散されてくるのだろうか？

活字の虫みために本好きの子供だったので、それまでにも手当たり次第さつざつに雑々ざつざつと読んでいた。⑦そうせき、中勘助、佐藤春夫、

吉川英治、林芙美子、吉屋信子、横光利一、それらに比べても鷗外の文章は、ずばぬけていいと感じられた。

十五歳くらいの小娘が、とふりかえつてみて思うのだが、この時の感動の質に当時表現こそ与えられなかったにせよ、「すぐれた散文とはこういうものか」と思ったその核には、今書いてきたようなこと、すべてが詰まっていたのである。

それ以来、鷗外のもものは割合読んできて、そのせいか人の散文を判定する底には、鷗外の文章が規準というか物差しというか、ともかく絶えず存在し動いてきた。

こうした自分の経験から、現代でも若者の中に似たようなことが起こっているだろうと信じていることができる。活字離れという現象しか目に見えぬ人は悲しい。数はほんとうに少ないが、⑧若者のなかに大人顔負けの良質の読書家が存在することを私は実感として知っている。

なにも散文とだけは限らない。いいものをパツと感受する力。なにゆえいいかということをやうまく説明することはできないにしても、その本質を捉える力は備わっている筈だ。

古典ぎらいの子は私たちの時代より更に増えているだろうが、五十数年を生きてみて、最近つくづくと感じさせられることの一つに、⑨文化の蘇生力、復活力というものがある。

これは相当にしぶとくて、絶えるかと思えてまた息ふき返すさまは不思議、不思議というしかない。

戦後まもなく、短歌俳句は第二芸術と貶されて消えているかに思われたし、⑩カブキは消滅寸前に見えたり、古典文学はボロ屑よりも粗末に扱われて、注闇市の席の上に投げ出されていた。あまりに哀れで十円に満たないお金で何冊か買ったおぼえがある。敗戦の大波に、古いものは根こそぎ攫われそうな様相であったのが、息ふき返して今花ざかりのありさまを見れば、実に驚くのである。

困るのは絶滅してほしかったもので、また同時に息ふき返してきたことであるが。

⑪十代の時はからずも、のつけから最高の鷗外の散文に出逢ってしまったわけだが、しかし鷗外風に書こうとか擬えようとした

ことは一度もなかった。もつとも真似まねようにも真似ることかなわぬ高度なものだが、さんざん書かされた作文にしる書くとすればともかく、自分は自分の文章を書かねばならぬと思ひ定めていたのは我ながら殊勝でもある。

鷗外が好きだからと言って、それが唯一無二と思つたわけでもない。鷗外とはタイプの異なるすぐれた文章にもそれ以後沢山触れてきた。ただ原体験とは強いもので、書く場合なるべく明晰めいせきに曇りなく、と私を引き据えようとするものに、若い時読んだ鷗外の散文がたしかに存在すると言えるだろう。

⑫ しかし散文はむずかしい。なんとも書きづらい。これを書きながらも行きつ戻りつ、あちらへ飛びこちらへ飛びもたついている。

散る文、とはよく言つたものだ。

一般には詩のほうがむずかしいと思われているのだが、長く書きなれたせいか私には詩のほうがはるかに楽である。

詩には「成つた！」と思われる瞬間が確かにあり、それは何ものにも代えがたい喜びである。もはや付け加えるものも削るものも何ひとつない。幼稚でも下手でもこれつきりという断念の潔いさぎよさに達する。それあるために書き継いできたのかもしれない。

⑬ ただ氷河のクレヴァスを平然と飛び越える離れわざみたいなことを絶えずやつていて、うまくいったときはいいが下手をすると水たまりを跨またいだぐらいのことで天馬空てんまを行くがごとき気分になつていたりするのは、われひとともによくあることだ。詩のほう、それだけまやかしの入りこむ余地は大きいと言えるかもしれない。

「なにゆえそこを飛び越えたのか？」と質問されても説明のしようもないし、また説明の必要もまるつきりないのが詩である。

散文を書く苦しさは、この説明しなければならぬところにあるのだ。散文の文体は叙述でなければならぬし、飛躍につぐ飛躍では上等の散文とは言えないだろう。事に即し、物に即して、じりじり律儀りちぎに的を絞つて「こうなのです」と言わなければならぬ。

それがひどく面倒めんどうで苦手なのである。要するにまだ散文の骨法こつぽうを会得えとくしていないか、或いはまた全く散文には向いていない氣質あひかもしれない。

散文を書きながら、ひどくこちらを悩ませるものは、例えばすぐ前に書いた「要するにまだ散文の骨法を会得していないか……」と書いた④「トタン」、

じゃ、詩の骨法はもう会得した？ いえいえとてもものに。

だったら「詩も未<sup>いま</sup>だし」も含めなければならぬ、が、それまで書くところじゃごちゃごちゃしてしまう。

『一本の茎の上に』茨木のり子

注1 女学校・・・旧制(第二次世界大戦以前の学校制度)の高等女学校の略。

注2 性格悲劇・・・人間の性格に由来する悲劇。

注3 闇市・・・第二次世界大戦の終戦直後に現れた、闇取引の品物を売る店が集まっている場所。

問一 傍線部①「授業が終わってから図書室に行き、森鷗外の『阿部一族』を読んだことがある」とありますが、森鷗外の「阿部一族」の文章を読んで、筆者が抱いた印象を説明した次の文の空欄に入る最も適当な言葉を文中から抜き出しなさい。

始めから終りまで 1 とした叙述でありながらも、言葉は 2 に選択されており、3、4、5 ではあるが、6 にあふれているという印象。

問二 傍線部②・④・⑥・⑩・⑭の片仮名を漢字に直しなさい。

問三 傍線部③「読み終わったときには深い溜息が出た」とありますが、この「深い溜息」が何を表しているかを二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問四 傍線部⑤「図書室を出るとたそがれていて、くちなしの花がやけに匂った」とありますが、この表現からわかる季節と一日の内のいつ頃かを書きなさい。

問五 傍線部⑦「そうせき」とは、誰のことですか。姓名を漢字で正しく書きなさい。

問六 傍線部⑧「若者のなかに大人顔負けの良質の読書家が存在することを私は実感として知っている」とありますが、「大人顔負けの良質の読書家」とはどのような読書家ですか。解答欄に合うように四十五字以内で説明しなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問七 傍線部⑨「文化の蘇生力、復活力」とはどのような力かを説明しなさい。

問八 傍線部⑩「十代の時はからずも、のっけから最高の鷗外の散文に出逢ってしまった」とありますが、十代で鷗外の散文に出逢った筆者は書くことについてどんな決心をしていたのかを、解答欄に合うように文中から十六字で抜き出しなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問九 傍線部⑪「しかし散文はむずかしい」とありますが、筆者にとって、散文のどういう点が難しいというのかを文中の言葉を使って六十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問十 傍線部⑫「ただ氷河のクレヴァスを平然と飛び越える離れわざみたいなことを絶えずやっつけて」とありますが、これは詩を作る時に行うどのような作業を指しているのかを解答欄に合うように書きなさい。

このページには問題はありません

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

そのころ町にはよく縁日がたつて、人々は植木や鉢ものをひやかすのが好きだった。①父は私に、娘をそこへ連れていけ、という。町に育つおさないものには、縁日の植木をみせておくのも、草木へ関心をもたせる、かぼそいながらの手段だ、というのだ。水を打たれた枝や葉は、カンテラの灯ひにうつくしく見え、私は娘の手をひいて、植木屋さんとはなしをした。「これだけしゃべらせて、なんだ、買ってくれねえのか」といわれたりすると娘は私の手をかたく握って、引っ張った。

春、植木市がたつ。お寺の②境内へ、かなりな商品が運びこまれ、ちよつとした市なのである。父は私にガマ口を渡して、娘の好む木でも花でも買ってやれ、という。汗ばむような、晴れた午後だった。娘がほしいといいだしたのは、藤の鉢植えだった。それは花物では、市のなかの③お職しやくだった。鉢ぼんごとでちよつど私の身長と同じくらいの高さがあり、老木で、あすあさつてには咲こうという、蕾つぼみの房がどつきり付いていた。子供は、てんから問題にならない高級品を、無邪気にほしがったのである。子供だからこそ、④おめず臆おそせずねだるが、聞かずとも知れる高価である。⑤ガマ口の小銭で買えるものではない。⑥私は買う

気などなくて、⑦子供と藤の不釣り合いなおかしさを笑ってすませ、藤の代わりに赤い草花をどうかとすすめた。子供はそれらの花は、以前にもう買ったことがあるとしりぞけ、小さい山椒さんしょうの木を取った。お職の藤から一度に大下落の山椒だった。ほしいものが買ってもらえなくて、⑧安値のものを嫌味にすねたのではない。彼女はさんしょの葉としらすぼしを、醬油しょうゆでいりつけたのをごはんにばらばらとまき、お菜に玉子焼をつけたお弁当が、好きだったからなのである。藤でなくても、山椒でも子供は無邪気に喜んでいた。私もそれでよい、と思つてうたがわなかった。

ところが夕方⑨のシヨサイからでてきた父が、みるみる⑩フキゲンになった。藤の選択はまちがっていない、という。市で一番の花を選んだとは、花を見るたしかな目をもっていたからのこと、なぜその確かな目に応じてやらなかったのか、藤は当然買ってやるべきものだったのに、という。⑪そういわれてもまだ私は気がつかず、それでも藤はバカ値だったから、と弁解すると父は⑫真顔になつておこった。好む草なり木なりを買つてやれ、といいつけたのは自分だ、だからわざと自分用のガマ口を渡してやった、

子は藤を選んだ、だのになぜ買ってやらないのか、金が足りないのなら、ガマ口ごと<sup>注3</sup>手金にうてばそれで済むものを、おまえは親のいいつけも、子のせつかくの選択も無にして、平気でいる。なんと浅はかな心か、しかも、藤がたかいのバカ値のというが、いったい何を物差にして、価値をきめているのか、多少値の張る買物であったにせよ、その藤を子の心の養いにしてやろうと、なぜ思わないのか、その藤をきっかけに、どの花をもいとおしむことを教えてやれば、それはこの子一生の心のうるおい、女一代の目の楽しみにもなろう、もしまたもつと深い機縁があれば、子供は藤から蔦へ、蔦からもみじへ、松へ杉へと関心の芽を伸ばさなるとはかぎらない。そうなればそれはもう、その子が財産をもつたも同じこと、これ以上の価値はない、子育ての最中<sup>さなか</sup>にいる親が誰しも思うことは、どうしたら子のからだに、心に、いい養いをつけることができるか、とそればかり思うものだ、金銭を先に云々して、子の心の栄養を考えない処置には、あきれてものもいえない——さんさんにきめつけられた。

⑩ 藤の代わりに買い与えた山椒が、叱られたあとの感情をよけいせつなくした。<sup>注4</sup>一尺五寸ほどの貧弱な木だが、鮮緑の葉は揉めば高い香気をはなち、噛めば鋭い味をひろげ、棘は<sup>とげ</sup>ヨウシヤなく刺した。誰のためにあがなった木だろうと、思わされた。だが、叱られたのは身にしてみたが、さればといてその後私が心を改め、縁日のたびに子に花のたのしさをコーチしたのではない。とかくルーズなのである。

子は大きくなっていった。花を見ても、きれいだというだけ、木を見ても、大きな木ねというだけ、植物にはそれ以上は心が動かないようだった。世話をして花を咲かすなどは、面倒<sup>めんどう</sup>そう。庭木の枯れ枝を一本切るにさえ、しづりがちである。ほかには優しい心をもつほうなのだが、野良犬<sup>のらいぬ</sup>にふみ倒された小菊を、おこしてやろうともしない固さなのである。草木をいとおしまぬ女が、どんなに味気ないものか、子ながら<sup>⑬</sup>うとましく思う時もあった。話しても説いても、心が動かないようだった。それまでも私は、あの時の藤でチャンスを失ったらしいと、後悔することが度々あったのだが、今更ながらこの責任は自分にある、とつらい思いをした。<sup>⑭</sup>いくら辛く思っても、もうおそかった。

年々四季はめぐる。芽立ち、花咲き、実り、枯れおちる。そのことあるたびに心はいたんだ。が、そのまま娘は人のもとへ縁付いた。孫がうまれた時、この子は草木をいとおしむ子になれと、ひそかに祈った。子に<sup>⑮</sup>怠ったことを、孫でつとめたいと思った。

けれども、私のおもわくはがらりと外れた。いいほうに外れたのである。思いがけないことに、娘の夫は花を好み、木を育てようとする人だった。土をいじり、種をまいて喜ぶのである。子が生まれ、結婚生活が落ち着いてから、その趣味とか心柄というかが、やつと形になって現れはじめたのである。意外な感じがしたのだが、もっと意外だったのは、そういう夫につれて娘もしみみと花をみつめ、芽をいとおしむ気をもったことだった。ほつとして、私はもう孫のことも安心した。

そのころから、しきりに、一度はどこかへ藤の花をたずねたい、と思うようになった。⑩追憶でもあり、あの藤のときの詫び心でもあり、改めて藤に見参しようという気もあつての思いたちだった。

この春、東京に近い地域の、古藤といわれる花を見て歩いた。野や山に自然のままにある藤でなく、人に培われ、かばわれている藤である。みな、美事な花をつけていた。一枝についている花でも、花房に長短があり、花色も、早く咲いたものはうすく褪めていたし、今さかりなのは紫が濃いようにみえた。注<sup>5</sup>おのがじし、咲くもののものである。花はどの花もおのがじし咲くが、園の藤、棚の藤というのと、一面ひとつらの幕になってさがる、ように思いちがえる。遠見はその通りだが、近くみれば、よく似てしかもそれぞれだった。長い房はメートルを超して、優雅である。短い房は、同勢そろって、さざめくように揺れ、これも美しい。藤波というが、風がわたればまさに波とみえる。なんということもなくこの花に「情緒」という言葉を思い当てた。植木市のなかで幼い目が捕らえたのも、あるいは情緒であつたかと察し、亡父があの時あんなにおこつて、心浅い女だと私をきめつけたのも、花が藤だったからのせいもあるうか、と思ひ、また、いやいや待てよ、そう何もかも身にひきつけて、収支計算したがることこそ、よこしまだ、とも思ひなおしつした。

しかし、花よりもその根に、おどろいた。千年の古藤というからには、根まわり何十尺と数える太さもさることながら、その形状のおどろおどろしいのには、目が圧迫された。うねり合い、からみ合い、盛り上がり、はい伏し、それは強大な力を感じさせるとともに、ひどく素直でないもの、私の強いもの、複雑、醜怪を感じさせた。花はどこまでもやさしく美しく、足もととは見るもこわらしく、この根を見て花を仰げば、花の美しさをどうしようとおろおろしてしまう。だが、それならといって、立ち去れもしなかつた。こわいものを持つ、押さえつけてくる力があつて、連れの人にうながされるまで、私はたたずんでいた。

どう考えていいか、いまもって納得はついていない。ただ、花にむかつては、追憶も詫びも済ませてきた、という思いがある。根には今度このたび新しく対面した、という印象が濃い。いずれ、まだこの次も、その根に逢い<sup>あ</sup>にくだろう、という気があるし、また一方、今度は山に谷に生きる自然の古い藤、若い藤の、花も根も見せてもらおう、とも心づもりしているのである。こんなことを思うのは、橋をも吊るといふ、藤の強さにしばられたのだろうか。

『木』幸田文

注1 お職・・・最高のもの。

注2 おめず臆せず・・・すこしも気おくれしないで。

注3 手金にうてば・・・手付金として渡せば。

注4 一尺五寸・・・約四五センチメートル。一尺は約三十センチメートル。

注5 おのがじし・・・めいめい。それぞれ。

問一 傍線部①「父は私に、娘をそこへ連れていけ、という」とありますが、父はなぜこのように言ったのですか。文中の言葉を使って二十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問二 傍線部②・⑦・⑧・⑫・⑮の片仮名は漢字に、漢字は平仮名に直しなさい。

問三 空欄部③・④・⑥に当てはまる言葉を、次のア～キのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。  
(同じ記号を二回用いてはいけません。)

ア いくら    イ いつも    ウ かなり    エ ぜひ    オ とても    カ もちろん    キ わざと

問四 傍線部⑤「子供と藤の不釣りなおかしさ」について、私はどのようなことに「不釣りなおかしさ」を感じたのですか。文中の言葉を使って書きなさい。

問五 傍線部⑨「そういわれてもまだ私は気がつかず」とありますが、私は父の子に対するどのような思いに気がついていないのですか。文中の言葉を使って四十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問六 傍線部⑩・⑬の文中で使われている意味として、最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ⑩「真顔になって」  
ア 真っ赤になって  
イ 無表情な顔をして  
ウ 真剣な面持ちになって  
エ 真っ青になって  
オ げんな顔をして
- ⑬「うとましく思う」  
ア 避けたいと思う  
イ いきどおりを覚える  
ウ あっけにとられる  
エ 興味が悪いと思う  
オ 興味がひかれる

問七 傍線部⑪「藤の代わりに買い与えた山椒が、叱られたあとの感情を余計にせつなくした」とありますが、このとき私の気持ちほどのように変化したのですか。文中の言葉を使って七十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八 傍線部⑭「いくら辛く思っても、もうおそかった」とありますが、この時の私の気持ちを説明した次の文の空欄A～Cに当てはまる言葉を文中の言葉を使って、それぞれ指定した字数で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

A (十五字程度)

責任は、

B (十五字程度)

自分にあると、つらく思い

C (五字以内)

気持ち。

問九 傍線部⑯「追憶でもあり、あの藤のときの詫び心でもあり」とありますが、私の「追憶」や「詫び心」を表している一文の最初の五字を抜き出さない。

問十 本文の内容に合うものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子は小さいころから市で一番の花を選ぶなど、花を見る目を持っていて、大人になってもますます花への関心を広げ、花の世話を楽しんでいた。

イ 父はわがままで、自分の思い通りにならないと怒りを抑えることができないが、孫に対してはかわいくてたまらない様子で、優しく接していた。

ウ 私は父の感情を損ねないように父の胸中を察したり、父の期待に応えるため常に努力を重ねたりするような、繊細で生真面目な性格であった。

エ 父はものの美しさを味わい感動する心を持つことは大切であると考え、価値のあるものに対しては、相応の対価を払うべきだと考えていた。

オ 私は藤の花のやさしく優雅な景色と、藤の根の力強く恐ろしい様を見て、その対照的な姿にあこがれを抱き、藤のとりこになっていた。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

面倒をみさせた。

大納言<sup>だいなごん</sup>なる人の若公<sup>わかきみ</sup>を清水寺の法師に養はせけり。父も知らざりければ、母の沙汰にて①養はせけるに、乳母<sup>めのと</sup>、法師になして清

大げさで慎みのない名

水寺の寺僧になして名をば大納言大別当<sup>だべつどう</sup>とぞいひける。こちなかりける名なりかし。件の僧<sup>くだん</sup>、以外<sup>もつてのほか</sup>に能書を好みて心ばかりは

たしなみて、③「われは」とぞ思ひたりける。

書かれた時から長い年月が経って

文字の跡だけが、

当寺の額は侍従大納言行成の書き給へるなり。年久しくなりて文字みな消えてかたばかり見ゆるを、この大納言大別当、「④文

それほどまでに尊い

どうして簡単に

字のみな消え失せぬとき、われ修復せん」といへば、古老の寺僧等、「さしもやむことなき人の筆跡をば、いかがたやすくとめ給は

消えてしまったら、

どうしようもない。

特にもとの字と変えて新

ん」とかたぶきあひければ、「いかなる聖跡重宝なりとも、あとかたなく消えうせんには、なにの益かあらん。別してわたくしの

たに書き加えなどするのであれば、よくないだろうが、

その跡だけでも

点をも加へばこそ憚り<sup>はばか</sup>もあらめ、かたばかりもその跡のみゆる時、もとの文字の上をとめて鮮やかになさんは、なにの難かあらん。

金箔を貼って美しく修理することもあるのだ

外して

下地も

古き仏にも箔をば押すぞかし」などいへば、「⑤まことにさもあり」とてゆるしてけり。その時額をはなちてあらたに地彩色して文

字のうへとめてけり。かかる程につきの日、俄<sup>にはか</sup>に雷電おびたたくして、その額を雨そそぎて、みなすみを洗ひてただ⑥に

どんな横なぐりの雨でも

とりぎたしているうちに

なしてけり。不思議の事なり。「いかなるよこ雨にもかく額のぬるる事はなきに、そのうへたとひ雨にぬれんからに、やがてすこしももとにたがはず彩色も文字も消えうすべき事かは。⑦これはただ事にあらず。おそろしきわざなり」といひてののしるほどに、  
若くして突然死んでしまったとかいうことだ。  
四五日をへて、かの大納言大別当天亡しえうまうにけるとなん。

『古今著聞集』

注 侍従大納言行成・・・藤原行成。小野道風、藤原佐理と並び称された能筆家。

問一 傍線部①「養はせける」・②「いひける」を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部③『われは』とぞ思ひたりける」とありますが、その意味として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大納言大別当は、「自分は書を一応は身につけた。」と思っていた。
- イ 大納言大別当は、「自分は書がほんとうに好きだ。」と思っていた。
- ウ 大納言大別当は、「自分こそが書の名手だ。」と思っていた。
- エ 大納言大別当は、「自分の大げさな名が嫌だ。」と思っていた。
- オ 大納言大別当は、「自分に合った名にかえたい。」と思っていた。

問三 傍線部④「文字のみな消え失せぬとき、われ修復せん」とありますが、その解釈として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 行成がお書きになった文字がみんな消えてしまったら、行成と同じぐらいの書の名手である私が、行成が書かれたのと同じように書いて、額を直そう。

イ 行成がお書きになった文字がみんな消えてしまったら、行成のようにはとても書くことができない私だが、行成が書かれたのに似せて書いて、額を直そう。

ウ 行成がお書きになった文字がみんな消えてしまったら、行成のようにはとても書くことができない私では、行成が書かれたようにはとても書けないので、額は直せない。

エ 行成がお書きになった文字がみんな消えてしまわないうちに、行成と同じぐらいの書の名手である私が、行成が書かれたとおりに書いて、額を直そう。

オ 行成がお書きになった文字がみんな消えてしまわないうちに、行成のようにはとても書くことができない私だが、せめて文字を書くだけは書いてみて、額を直そう。

問四 二重傍線部「とめ給はん」「とめて」「とめてけり」とありますが、「とむ」という動詞は、この文中では、どのように使うのですか。考えてわかりやすく書きなさい。

問五 傍線部⑤「まことにさもあり」とありますが、誰がこのように思ったのですか。主語として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大納言なる人    イ 大納言大別当    ウ 侍従大納言行成    エ 古老の寺僧等    オ 作者

問六 空欄部⑥に当てはまる言葉として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 鮮やかなる様

イ あらたなる様

ウ みごとなる様

エ もとの様

オ 古き仏の様

問七 傍線部⑦「これはただ事にあらず」とありますが、どのような点が、今までになかったことで「ただ事」ではないのですか。  
二点に整理して書きなさい。